

檻樓（らんる）という言葉とその漢字に初めて接したのは20歳の頃吉谷君が文章に書いていた。それ以来オレの脳の隙間に刻み込まれ時々顔を出していたといっても、ボロ、ボロギレという意味で、それこそ脳の隙間で風にたなびく極色彩のぼろ布の切れ端が揺れている、竹の竿を持っているのは上半身が裸の男、汚い男、オレかもしれない風采の上がらない男が竹竿を持って河原の砂の上を草の上を走っている、竹の竿に結わい付けられた布が弱々しげに揺れたなびく、男も河原の景色もモノトーンなのにボロギレだけは色付きでカラーである。そんな事を考えてみれば、オレにとって檻樓はただのボロギレではなく、色々な色を散りばめた極色彩とまではいかないまでも豊かで嬉しくなる悦んでいる色が付けられた布なのだ。

余談ですが物忘れがひどい、健忘、認知症なんていうような単語が頭を過（よぎ）る、同年輩の人並に人名地名を忘れ去っているのは当たり前毎度の事で、約束事予定している事を忘れていて、今日はあれとあれの日だと朝起きてカレンダーを確認して、そこの書かれた予定行事を見て自身の行動を決めるのだけれども、朝食、アトリエに入ってメールのチェック書類のチェック絵のチェックなんて作業をしているうちにそれらの予定が頭の中から飛んで行って、何時間か経って思い出してはっとして、というのだが後の祭り、約束の時間が過ぎている、欠席なりキャンセルなりになってしまっている。すっかり忘れく忘れっぱなしという事も多分あるのだろう、若い頃なら「こらあ、忘れるぞ、なんで来ない」と怒りの連絡も入ったが、連絡さえ来ないという関係になってしまっているのかも知れないね。何時間か何日か経って普段通りの日常生活をしている最中にふと、「そういえばあの時約束をしていたが・・・」とその事を思い出して、今は何をしている、今はこれをしなければいけないのだという事までおろそかになってしまって「アレレ、忘れていた」とその失敗に悔しさに残念さにという感情が“今”をも忘れさせて、不甲斐なくもじっとしてぼっとしている自分を発見なんて情けない事がたまにある。

ただこれも考えてみると“生きている”“人間である”という事であって、先日亡くなった飯橋先生の事を思うと、予定も約束も思考も全てが無になる、存在しない、オレの頭の中で物言わぬ彼が居るだけ、忘れるという事はオレがまだ居るのだぞ、存在するのだと思ってもらえばいい。時間も空間も在ると思う人にはあるが「時間も空間も存在しない、そりゃ幻想じゃ」と嘯（うそぶ）く輩には、これはオレの事です、えらそうに申しますが、今も此処も仮の世界、幻想の世界なんて裏の裏を見透かしたような事を申しまして、でもそう思っております。そう思いますと“時”も軽い、“命”も軽い、“人生”も軽い。

中西プロが「檻樓くんを撮ろう、それをトロウ」と言ってくれる。オレの頭の中には構想が次々と浮かぶ、たかだかfigureを作ってそれを写真に撮ろうと思ってから何年か、彼らを森や川に持って行って撮影してみようかという事から、彼らを並べて行列を作ってみたら、彼らに演技をさせてみたら、とそこまでだったのだけれどもふと考え付いたのが、オレも出演してみようか、檻樓くんな様な彩色をオレ自身にして手造りのお面を被って、オレだけじゃなくもっと仲間を増やして何人も出演してと次から次に構想は湧いてくる。

檻樓くんというのは何年か前から創りだしたfigureの事で大きさが20センチ30センチぐらい木の骨組みに布やら紙やらを貼って絵の具で彩色をしています。

そのfigureを檻樓くんと名付けそう呼んでいます。

檻樓くんを森やら川やらに持って行ってカメラで撮影をした。プロが当時からおもしろいやあおもしろいと何度も撮影してくれた。

今、オレも同じような格好をして、同じような彩色をして、同じような面を着けて、同じようなボロを纏って彼らの横に並んでみたい、いやいやオレだけでなく2人、3人で並んでみたい。それでは檻樓くん抜きでもいいのでは、檻樓くんが居なくても、檻樓くんの代わりに我々が並んでみようか、行進してみようか、動き回るか静かにしていようか、音はどうするね、リズム楽器が鳴るのがいいか、メロディーを流そうか、若い仲間を集めて助けてもらわなければ、夢は話はオレの中で膨らんでいく。

相変わらず毎日のように近所の安威川に通っている。

六月<水無月・june>に入るとさすがに暑い、梅雨の季節ながら今の天気予報は晴れマークが続いて3か目ぐらいに雲のマークもあるが傘マークはない、というわけとにか暑く、報道機関が言う夏の夏が続いている、暑い。例年冬の期間は昼食後に走っているがこの季節が近づくと昼に走るか夜に走るかと考える、暑さの中のジョギングは楽しくないからね。昨日は昼食後に家を出た今日は3時過ぎに家を出たとはいえ、12時も15時も暑さはそんなに変わらなかった。それともう一つ話があるというのは、左右どちらに向かうかという事で、右に行けば川下で人が少ない、左に行けば山が近づき、電車の線路が2本もあり、人も多く建物もたくさんある。いずれにしろ走るのが一番楽しいのは昼間の明るい時間帯に水を見て、草を見て、鳥を見て走るのが最高だが暑さゆえ仕方なく夜の真っ暗な中を走っている。その左右のもう一つの話というのが立ち小便の話である。この小便の話、冬場いざ走ろうとするも身体じゅうがブルブルとなって、走りだしてブルブルは止まっても汗は出さず尿意を催す「そらあ、歳のせいだ」と言われるも途中小便がしたくなる。「男なんだから何処でもどうぞ」とは言われるが土手の上を見れば人が車がマンションが見え「ちょっと失礼」とは言いにくい、寒い間は人の少ない方を選んでいくと色々オレなりに工夫して走っているわけです。

その安威川でもう何組か見たのだけれども、鴨の子連れ、鴨の行列が微笑ましい。少ないもので子を6匹、多いものだと子を9匹も連れている。親鴨の後を追って子鴨が歩く、泳ぐ、あっと思うと木陰草陰に隠れる、とにかく一心同体というか一生懸命親の後を追っている。子は今はまだオレの拳位の大きさだけれども、ほとんど親の大きさに近くなっても行進は続いていたと思うが、大きくなるにつれてバラバラ感が出ていたように記憶している。

昨年も一昨年も春は身体の調子がよくない、臃げに春はいけない、いけない日が長く続いたと思っていたが、今も6月の声を聞くと不思議とだるさが取れ、元気が湧いてくる、活力が出て来るとまではいかないものの、身体が軽い、やっと元気になれたと喜ばしい。3月4月5月<弥生・卯月・皐月>とこの3カ月が体調がよろしくない事がわかった。もう臃（おぼろげ）などとは言わせない、はっきりとした、この3カ月だ、この間花粉がオレを攻めてくる、この間だ。2月末に北野外科で健康診断を受けた、すこぶる元気と思いつつも、検尿、心電図、胸部レントゲン、検便と済ませた。3月の声を聞いたその日から目がムズ痒くなり、2.3日で鼻水が出てきた。それでもまだまだ元気だったがだんだん目が痒い、水鼻にくしゃみ、寒気、喉の痛み、と風邪ひきと同じような症状が連日続き、体力が半減、気力が半減、身体がだるい、いつもの元気が出ない、病気というほどではないけれども、医者に罹るほどではないけれどと時が過ぎ、体のだるさは嫌だねと思いつつ、山にも行った、雪の中でも寝た、しかしこんな事はよろしくない、ついにほんま物の風邪ひきが来た、なかなか治らない、水鼻がネトトリ黄色くなり、苦しい咳が出始め、防寒具が無いと寒気が止まらない。ほんま物の風邪ひきはなかなか治らない「ウツサナイデ」と家族に言われるけれども、こればかりはどうにもならない、家族が咳・鼻・喉と何日かゼイゼイの日々、一人は6日間の薬3000円也、一人は3日間の薬2500円也と医者代。3日間の薬が3日目でも治らない「治らなければ薬を変えますのでまた来て下さい」という通りになるのかな、オレも歳かなあ、医者通いをしないといけないのかなと思案をしていたら4日目に身体が軽くなった。今回もらった薬の中に貼り薬があった。風邪ひきなのに貼り薬と訝って調べると、咳、ぜんそく症状の貼り薬は最近よく使われているらしい、その貼り薬に対してたくさんの書き込みもあった。貼り薬を背や胸に貼るとジワリと皮膚を通して体内に長時間持続的に浸透する仕組みで、咳に喉にいいものらしい、最近流行の薬らしい。

アトリエに絵を描きに来てくれている田鶴ちゃん「家族の者は後回し、其処らへんに在る薬、のんどき」で終わりと医者のご主人に対してぼやいている。オレは決めた来年こそは3月になったら医者に行って、花粉症の薬をもらって、この3カ月を無駄にすまい、3カ月の体調不良は大いなる損失、来年の春は花粉症知らずで乗り切ろう、お医者さん頼みますね。

今日は鴨長明の事を書こうと思ったのが、鴨の親子行列の話になり、風邪ひきの話となった。

前回、アトリエに絵を描きに来ている田鶴ちゃんが「家族の者は後回し、其処らへんに在る薬、のんどき」で終わりと医者のご主人に対してぼやいているという話から、その田鶴ちゃん予定通りなら今日からフランス・スペイン方面サンティアゴ・デ・コンポステーラに旅立った。永井君からもらった、サンティアゴ・デ・コンポステーラ・巡礼の旅、その紀行本を見て「行きたい、行きたいと思っていた」と目を輝かせていたがそれから半年もたたないうちにその旅を計画するとはたいしたものだ、たいした行動力だ。そう決めて一人で半月の旅に出かけた。「お母さん何か生きている事に不満でも在るの」と巡礼を計画している母に対して娘が言っていたと苦笑「日本人の老婆倒れる、なんてニュースにならないよう楽しんでくるね」と若々しく笑っていた。同じようにアトリエに絵を描きに来ている恭子さんもこのサンティアゴ・デ・コンポステーラに興味を持って秋にでも行けたらと夫妻で計画しているとか。わがアトリエは永井君の影響が大である。オレの頭の中、巡礼、乞食、飢饉と溜まっている、澱んでいるようだ。

鴨長明が文章で大火、地震、飢饉の話を書いている。

玉敷（たましき）の都のうちに、棟を並べ、葺を争える、高き、いやしき人の住いは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。或は、去年焼けて今年作れり。或は、大家滅びて小家となる。住む人もこれと同じ。所も変わらず、人も多かれど、いにしえ見し人は、二、三十人が中に、わずかに一人二人なり。

先日も長明先生の有名な方丈記の出だしを暗（そらんじ）ている人が居た。WEB上の先生が、鴨長明の人生は転落の人生、下級とはいえ貴族の子に生まれ、賀茂神社の禰宜である父と同じような位の職に就くはずだったが、7歳の時に従五位の位に就いたのが人生の最高位で、和歌に琵琶に励んだけれども世に認められず、最晩年は伏見の山の中で小屋を建て引き籠り亡くなった。その小屋を方丈庵という。引き籠ったその頃少年との交遊が微笑ましい。

行く川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある、人とすみかと、またかくのごとし。

また、麓に一つの柴の庵あり。すなはちこの山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々来たりてあひ訪ふ。もし、つれづれなる時は、これを友として遊行す。かれは十歳、これは六十。その齡ことの外なれど、心を慰むる事、これ同じ。或は、つばなを抜き、岩梨をとり、ぬかごをもり、芹をつむ。或は、すそわの田居に至りて、落穂を拾いてほぐみをつくる。

世の中飢渴（けかつ：飢饉）それまで漢字で書かれていたものを、方上記では仮名文で書くことにより、多くの人々の感性に訴えた。

世の中飢渴して、あさましきこと侍りき。或は春・夏、日でり、或は秋・冬、大風・洪水など、よからね事どもうち続きて、五穀ことごとくならず。むなしく春かえし、夏植うるいとなみのみありて、秋刈り、冬収むる騒（ぞめき）はなし。

二条烏丸を過（よ）ぎらんとするの処、飢死の者、八人首を並べと云々、よりにこれを過ぎらず、近日、死骸殆んど道路に満つと云ふべきか。

図版は昔見た山小屋風景を思い出しながら描いてみました。登山を始めた四半世紀前頃は、駅のプラットホームにリュックザックの長蛇の列だった登山ブームが終わり山に登っているのはプラットホームの残党、40歳代、50歳代の兵（つわもの）が多かった。小屋に自家発電の装置がある、ヘリコプターで荷を運ぶようになった頃だと思われるが、中には、山小屋に電気が無く灯りはランプだけ、日用品や食料を歩荷（ぼっか）で運んでいるような小屋もあった。

食事も大鍋に水っぽい味噌汁と鮭の焼いたものだけとか、インスタントカレーをかけただけという物もあった。ただほとんどの小屋のトイレは垂れ流しだった。

13-040 よろけ 110613

“よろけ”とは江戸時代の鉱山病の代表的なもの、坑内労働者が採鉱の際、鉱塵が肺に入り溜まる珪肺を主とした病氣。当時の採鉱労働は若い鉱夫でも3年もすると老人のようになったという環境の劣悪さ。鉱夫は18歳19歳で入山しほとんどが30歳で亡くなった。それでも給与水準の高かった鉱山労働者は近隣の人々が募集に応じて集まった。一旗揚げたい人や出稼ぎ農民等色々な人たちが居た。鉱夫たちが落とすお金で近隣の町は潤った、どうせ長くは生きられない、今の元気うちに、金のあるうちに大いに楽しもう遊ぼうとお定まりの歓楽街の出現か。江戸時代佐渡金山には江戸から無宿人、罪人が強制連行され水替人足として過酷な労働が科せられた。当ブログ13-036で紹介した越後の水呑弥三郎も、一揆を首謀した罪で水替人足として過酷な労働が科せられ、何年かの労働の後放免されたが“よろけ”になっていた。ほとんどの水替人足は何年かの期間を過ぎたら放免があるも、命がそれまで持たなかったと記されている。

近々、市の人権の会主催で生野銀山に行く予定があるものの、先日来オレの頭の中には佐渡銀山、飢饉、地震と話題がぐるぐる回っているので少し調べてみた、といっても今回の興味は労働者のこと。労働、過酷な仕事、汚い仕事、命がけの仕事等は昔から奴隷、罪人のような人間が強制的にさせられた、檻に入れられ、縛られ、殴られ、脅かされ、命を脅かされ、涙ながらに仕方なく身体を動かした、労働した、力を出したと思っていた。何かの機会に聞いたような気がするがエジプトのピラミッドを作るのに駆り出された労働力は、奴隷だとか最下級の労働者ではなく誇り高い人々が自分の為、自分たちの村の為、自分たちの王の為にピラミッドを作る喜び、作れるという力の誇示、完成させたという喜び誇りがあの膨大な工事を遂行したのだと聞いた事がある。過酷故に、汚い仕事だからこそ、命懸けの危険な場所だからこそオレがやらねば、私しかできないので私が行かなければ、こんな仕事は誰にも出来ない、誰もが行きたがらないけれども私なら上手くこなせる、オレなら易々と仕上げて見せる。「命をかけて戦ったのは我々だ」「おいらは命知らずの職人だ」「小々の事では音をあげねえよ」「ヤマ、そんなものが怖くてヤマに入れるか、ヤマが掘れるか」「身体をすり減らすのがオイラサ」「数々の修羅場で身体を張ってきたんだよ」と勇ましい言葉を聞いてきた。聞いてきたといってもこれらの芝居があったセリフは、酔ったおっさんのうだ話しのついでに出たセリフのような啖呵か大映映画の俳優のセリフか、ほんま者のこれらの人「よくまあ生きてこられたものだ」「若い頃は無茶をしたものだ」と下を向いて黙っている。これらの人がオレに苦労話、自慢話、仲間の話はしないだろう。いずれにしても過酷と思われる労働、人から見れば殉教とも思われる辛い労働も、それこそ好き好んでその仕事に向った人が案外多かったのでは、いつの時代でもそういう人がたくさんいたのではと思う。こういう話をするのは多少浪花節的かもしれないが人間万歳の感がある、というのはオレだけかな。

何もあくせく働くことは無い、ポーっと出来るならずっとポーっとしていたいというのもよし、身体を動かしていたい、人の役に立ちたいと動くのもよし、何があってもいいよね。義務やら強制やらは嫌だけれども、これも仕方が無い、しなければならぬ事もあるね。

少し意味が違うかもしれないけれども、生きていて、微小、些細、仕様もない事で「私は少しあの人とは考えが違う」「私はその考えには付いて行けないので別の方向に行かせてもらう」というふうになんかの人から寄れば上から下まで少しづつ違った意見、違った考えが出てきて、それらの人々はそれぞれ自分の思ったように、自分はこれが一番いいという考えに沿って動き歩んでいる、自分の好きな道に進んでいる、それを貫いている。人間とはそういうもので「みなさんこういう風に行きましょう」「我々の道はこちらです」「こういう事はやめましょう、いけない事だ、よくない事だ」と色々な場において考えを纏めよう、規則を決め規則を守ろうとし過ぎると、そこに無理が出て後々齟齬が生

じる。法やら規則は小さい方がいい、守ることも小さくていい、守らない輩（やから）を罰するのも小さい方がいい。

### 13-041 パソコンが潰れた 170613

パソコンが潰れた、全く動かないとわかったとき「・・・」「どうする」「どうしよう」考えてみればいろんなことにアトリエに置いてあるパソコンを使ってきている、向き合っている時間が結構長い、皆さんとの連絡もほとんどメールでやっているのに連絡が取れなくなるでしょう。次にこの日記という名のブログ、これも月に7、8回パソコンでアップしているのだがどうしよう。ブログ毎回パソコンの用紙1枚にたっぷり書くようになってしまって、えらく長いのだが原稿用紙に直すと何枚ぐらいなのかいつの日か調べてみよう、と下らない事を言っただけで又書いている。次に写真をよく撮る、記念写真やスナップ写真でなく絵の写真、絵のための材料素材の写真、毎日のように撮ってパソコンに取り込み、ああでも無いこうでも無いと加工する、絵を描きに来ている方々の絵の写真を撮って同じように加工してこんな風に変えていけば、こうすればもっと良くなるかも、あちこちを触って濃くしたり薄くしたり、部分的に消したり描き加えたり、まずこれでと自信の持てる画像をお見せすると喜んでもらえる、こんな作業が次から次に在って、筆を握る合間にパソコンをその都度使っているわけです。

昔マックを買った当初、何もかもがわからなく、しかもマック君機嫌のいい機械でなくすぐにプツンしていた。当時パソコンがそのままの画面で止まってしまう事を“フリーズ”だと覚えた。時を同じくしてアメリカで日本人の少年が銃で撃たれて死んだ。少年がハロウインの仮装をして街を歩きながら人に近づきすぎたのか、銃を持ったおっさんが恐怖に駆られて「フリーズ」と怒鳴ったのに平気で通り過ぎようとしたらしい。フリーズとは「止まる、固まる、動くな」というような意味だと改めて覚えた。

今のパソコンは新品から丁度5年を過ぎたところ「デジタル機器は5年で潰れる、5年しか持たない」とよく言われる。パソコンもその周辺機器も、デジタルカメラもそう言われている。機械自身はまだもう少し使えるかも知れないけれど、その中身性能機能が日進月歩に進行中で、新品の機器も5年も経てば、数倍数十倍に能力アップしているのに値段は5年前の何割安、半値ぐらいというのは普通だ。このパソコンももう1、2年ぐらい持ってくれと思っていたが、潰れた、という現実が突然やってきた。

少々内輪の話、美術系だけの話になるかもしれませんが、adobe系のillustratorsとphotoshopというソフトを使っているというより、これらを使うために昔に車1台分の高価なマックのパソコンを買い何年かかかってある程度使えるようになったが、最初の目標のパソコンのプロになろう、パソコンを使いこなして絵を描こうということは諦めた。パソコンから出てくる画像はオレのものじゃない“オレじゃない”と気付いたと言っただけでなかなかながらいいが、デジタルの絵はオレじゃない。ただこれらのソフトはずっと付いて回っており、いつもこれらを使っている、これらしか使いこなせない、普通に使われている“ワード”のようなソフトはむしろ苦手だけれど、ワードは文章を書くときに誤字脱字のチェック機能があるので文章を書くときだけ使用している。と話はそれだが、先日来illustratorsを使ってちょっと訂正するという画像を「ここここを直すのに1時間もあれば充分」というのが半日もかかってしまった。とにかく言う事を聞いてくれない、思ったように作動しない、パソコンといえども大工道具や調理器具と同じで、画像やら資料やらを作るための道具、器具なのだ、それがうまく作動しないといくら上手に道具、器具を扱っても前には進まない。とにかくその訂正をやっと済ませて何時間か後にはもうパソコンが立ち上がらなかった。「れれれ」と大事にしまってあるパソコンの説明書一式を取り出して、まず本を開いて何度か試行、再生のCDを入れてもう一度試行、「メーカーに電話して教えてもらおう」と思い付くまでに半日が経っていた。

メーカーのサポートの兄ちゃんはなかなか親切な方で「まずは電源を入れてください」オレは電源を入れるがピーという警告音が聞こえるだけ「なるほどその音はメモリの接触が悪い時に出る音なので、メモリをはずしてみてください」

い」え、これは時間がかかるけども電話はそのまま、繋いだままでいいのかと聞くと、ゆっくりやってください、待っていますとのこと、うんうん言ってメモリをはずしたり入れ替えたり、その都度電源を入れてみたが反応はなし「それでは次にメモリの横に電池がありますのでそれをはずして、また入れてみてください」電池は何処に在るのか大慌てで探したら、グラフィックボードの裏にあった「やはりだめですか、今電源ボタンの色はブルーですか黄色ですか」

13-042 関係の異和 180613

吉本隆明著<島尾敏雄>今、書きながら「えらく古い話、こんな名前は知らない人が多いだろう」オレにとっては懐かしい名前だけれど若い人にとって「誰、何者、知らないね」とそっぽ向かれそう、我が家でも娘からは「・・・」と無視である。余談は置いて読みだしてすぐにおもしろい処にゆき当たった、と興奮気味、いつものように枕元のライトを消してすると眠りに入るつもりがなかなか寝付かれずごそごそ起きだした。吉本先生の話が面白い、島尾敏雄の小説はいくつか読んだ「洗い浚いに家族の話を小説にして破天荒な人生を歩んだ人、その私小説は魅力的だ」ぐらいしか知らなかったがネットで調べてみた。島尾 敏雄 1917年~1986年 特攻隊隊長、発進の号令を受けぬまま終戦と聞けばオレの親父の世代だ。「死の棘」を読んでいいなと思ったが、映画になったのには驚いた。自らの浮気問題を機に妻が心の病に冒される、という現実の話を小説で書いていた。エピソードとしておもしろいことを発見、オレのお気に入りの中上健次と「おまえなんか・・・」と飲み屋で喧嘩をしたとは痛快。余談ですが後日中上健次の小説の中で寝屋（ねや・ベッド）の話を紹介します、ぞくぞくしますぞ。

私はここで、島尾敏雄の<資質>世界の中枢を<関係>の<異和>という点にみとめてゆきたい。このばあいの<関係>は人間と人間との関係であり、人間と自然との関係のことではない。こう断らねばならないのは、島尾敏雄の作品の世界で、自然に対する緊密な混融感、人間に対するときの、あの陰暗なはてしない異和感とまるであらに、いわば地誌的な存在感ともいべき特質を形づくっているからだ。作品の中で人間との関係に眼ざしを向けるとき一度も<他者>とじっくり同時に会おう事が出来ない。遅ればせに<他者>に出遭いに行けば<他者>の貌はすでに自分のほうへ向いておらず早めに準備をととのえれば、まだ<他者>は自分の意識や行為に向かって到達していないといった具合だ。こういう関係意識のちぐはぐさは、だれもがいつもどこかで遭遇しているありふれたものに違いない。そして普通は二つの方向に分かれる。多くにひとはこの関係意識のちぐはぐさを<忘却>によって飛び越える。中略もうひとつの違った人々は、このちぐはぐさを拡大する方向に向かう。妄想連鎖を作る・・・読んでさすが吉本先生、すごいことを見つける、なんとこの様に分析解析するのかと感心した。先生の話どんどん進んでゆくだけれども、今はオレはオレの世界に入り込んでみたくなったので、少しその話を。

人間と人間の関係ということで、この社会では自分が主人公ですが、小説の世界ではAさんが主人公で、Aさんが自分の代わりにあれやこれやの世界を作っていく、歩いていく、自分もAさんという主人公も同じように混沌とした世界を泳いでいく。自分だけが自分ではなくて、自分もAさんも同じように自分であったりAさんであったりする。〇〇さんが声をかけた「やあXXさんこんにちは」と挨拶を受けたXXさんが、急いでいるのか、時間があるのか、考えているのか、ほっとしているのか、又は挨拶の声をかけた〇〇さんが、急いでいるのか、時間があるのか、考えているのか、ほっとしているのか、そういう場面を想像するだけで数学的に考えただけでも十の何乗の場面が想定される。気持ちの揺れ、感情の揺れが思われて、人間と人間との関係とその異和の重さを大いに感じる。だけれども、そんな<異和>は自分、架空の自分、他者とたくさん的人が出てきて、十の何乗の場面舞台を考えてしまうから、十の何乗の事を考えどう対処しよう、どう乗り越えようと考えてしまうから、キラキラ眩しい美の世界を飛び出して、醜悪な現実の世界に向かうのでは。あまりに人間の生き方を条理に当てはめず「生まれて生きて死ぬもの」と考えて、呵々大笑といきたいものですね。なんて悟ったような事を言っていますが、細かいことに悩んでおります。

最後に一言、吉本先生が島尾の人間と自然の事を「人間に対する異和ではなく、自然に対する緊密な混融感・・・」と。ここでまたオレが出しゃばってオレの話になりますが、「美しい、空気が澄んで爽やか」と打ち解けて混融して楽しんでいますが、この自然はオレが好んで仲良くなれる中途半端な自然で、ほんま物はたちまち殺されますぞ。

13-043 龍 230613

良寛さん、水呑弥三郎、方丈記と読んだ本の中に出てくる飢饉の話が続き「アッ」と思いだしたのが龍の話。はなはだ我が住まいの地域限定話ですが、十数年前に近所の小学校創立三十年で記念誌を作る話が決まり、学校の歴史、当時の先生・児童が作る記念誌に合わせ、学校の中やら周りやらの自然・歴史などを載せた別冊も作ろうという話になった。その別冊を手伝ってという事で、学校周辺で記事になるような何か面白い話はないかと人に聞いたり、図書館に地元コーナーを調べたりして、市誌の中でおもしろいものを見つけた。余談になるが1年かけて植物・動物・昆虫といろんなことを俄勉強で文章を作り国語の得意な先生と何度も読み合わせ、書きなおし、添削をし、絵を描き、写真を撮り、おおよその印刷用版下を作った、無料奉仕の1年だった。出来上がった本は最後にデザイナーが入ったおかげで立派なものになったが、年を経て俄勉強はほとんど消えてしまった。

小学校の西 500 メーターの処に小さな祠と楠の大木が在る、今も在るが、7, 8階のマンション、今風の家に囲まれひっそりとしている「え、祠？」と気付かない人もいるくらいだ。オレがこの地域に住み始めたのが半世紀前、50年前は駅前と違ってまだまだこの辺りは田舎で、今は1万人を超える人口も500人1000人という数字だったと思われる、黒い瓦の木造建築の昔ながらの家しかなく、周りはほとんどが水田、舗装もされてない細い道と曲がりくねった水路、それこそ田園風景そのものだった。たった50年でこの地域はがらりと変わってしまった。江戸時代から50年前まで田圃の中にその祠がポツリとあった、その祠で雨乞いの神事が行われていたという話を知って「すごい風習があったのだ、こんな真近におもしろい風俗があったのだ」と驚いて、これを記念誌に載せよう、ついでにこれを復活させて地域起こしにでも使えたらと仲間をせっついた、せっついた仲間が夏祭りに取り入れ今日の主人公の龍は大いに活躍している。

飢饉の事を調べたら、江戸時代から全国的な規模のもの、それが何年も続いたもの、東北、北陸地方に限ったもの、と何百年間の間には大変なことが何回もあった、何年も続いたようだが、原因は暑くならない夏、雨が降りすぎたり、降らなさすぎたり、病気に虫と色々あったようだ。今年はこの3,4日は雨が続きで梅雨らしくなったが、その前は梅雨の季節なのに乾燥注意報が出て、安威川の水が干上がり、大きな魚は何処に行ったのかと心配していた、安威川のいつもは滔々と水が流れている場所が干上がって土が見えているのにはびっくりだと思っていた。昔から百姓仕事はこの地域では六月に田植えをした、田植えをするには田に水を入れ池のようにしなければならない、池のようになった水田に稲の苗を植えた、水はずっとそのまま、池の中で稲が育っていった。田を池のようにする大量の水がなかったら稲は育たない、先日までのような乾燥した気候がいつまでも続いたら雨乞いでもしない事には稲は育たない、稲作が一番大事な当時は、まさに死活問題だったと思う。

この地域の雨乞いの神事は、10メートルもあるナマズのような龍の姿を作って楠に巻き付け、鉦や太鼓を叩き、1週間2週間と祈り踊るというもので、雨が降るまで続けられた。「テントのおかげ、ひやくにコメいってごしょう：お天道様のおかげ、百姓に米一斗五升」という歌詞らしいがその歌のリズムはわからない、何十年前に作った龍と若者の写真があるのでその姿はわかる、音楽のリズムがわかれば最高なんだが・・・。藁を束ね10メートルもある胴体を作り、そこに琵琶の葉を差し込みうろこに見せる。歯、目は茄子で、ひげは棒で、写真を見る限り素朴なナマズのようなだったが、10メートルもある大きさのものを作り、篝火を焚き、鉦や太鼓を叩き、大声で歌い舞うのは素晴らしい、当時田圃の真中、真っ暗の中、火に浮かび上がる人たちはまるで夢の世界、異様な光景と想像される。若い半裸の男

女がお神酒をいただいて、温かい夜空の下、篝火の光、木や藁が燃える赤黄色い光を頬に、身体に受け、その反対側は真っ暗の闇、想像するだけでぞくぞくしませんか、夜の闇の中で行われる土俗の神事、こんな素朴な事がついこの間まで、こんな間近で行われていたのだ。ほんま物を見たかった、とは言え無理な話、こんなに大勢の人が居てはだめだ。

13-044 梅雨-宇佐美けい展 280613

六月ももう最後の週に入り梅雨らしく雨の降る日が多くなった。雨の中<宇佐美けい展>を観るために家を出た、というのは最近電車に乗ることもめずらしく、服を着替えてさあ外出というのが少なく、行かなければとか行きたいなという気持ちが背中を押してくれないとなかなか外にも出なくなった。結構なジャジャ降り、本降りの雨、この雨の中を駅まで10分歩けば、靴もズボンも上着も濡れそうなので大きな傘を選び、足元は軽登山靴を履く。毎日のように出かけていた若いころなら、この暑さならこんな風に、この程度の雨ならポロ傘をさして向こうに着けば置き傘にして置いて帰ればいい、ジャジャ降りのドシャ降りなら雨靴・雨合羽に大きな傘、ついでに鞆の中にはタオルを詰め込むというようにその日のお天気に依っていろいろ工夫をいろんな恰好をしたものですが、そんな工夫思案もうまくいってほくそ笑む事もあれば、空振りに終わり無駄な事をしたと一日中雨具の入った重い荷物を担ぐこともあった。せっかく用意していたのに出かける寸前に躊躇して置いてきてしまったとドシャ降りの空を見て天を呪ったり、クーラーの効いた車内で震えていたりと思出すだけでもたくさんの事があった。

宇佐美先生の絵は西洋画だけれど和紙と墨をうまく取り入れなかなか洒落た絵だった。大阪住吉区辺りの中学校の美術科先生を40年近くやっておられたようで、忙しい中で絵も描かれていたようだ。立派な画集が置いてあり中身をパラパラめくると二十歳の頃和歌山大学の美術教室で粘土の胸像を作っている風景が載っている「私にも若い頃があったのよ」と大笑い。「ほとんどの人が和歌山県に就職して紀伊半島の真中の学校に赴任していったけれど私はたまたま大阪で5人募集がありそれに応募して住吉区辺りに居つくようになった」とおっしゃっていた。オレの周りの知人友人に元先生が増えてきた、もともと絵を描く仲間がたまたま先生になった、同級生がたまたま先生になった、というような仲間の先生だけだったが、地元の小学校先生や地域在住の現役先生や退職先生たち、その先生たちに紹介される先生というように増えてきた。オレの親兄弟に教師はいないが、爺さん婆さんは先生でその兄弟たちも後から聞くと教師がたくさんいて、子どもの頃にはその家に行って遊んだが、家の中は片付けもなくひっくり返りむさ苦しいおっさんが美しくもない普段着で茶漬けを食っている姿は、威厳も貫録もなくただの爺さんだった、とは言え当時まだ60歳前だったかもしれない。威厳も貫録も思い出したのが小学校当時の校長先生、<イマイキジュウロウ>と名前も覚えているが絵に描いたようなちよび髭、在るかないかの髪を油で撫でつけ、三つ揃いの背広姿は田圃の真中の小学校で一際目立っていた。担任教師の不在時に教室に来て真冬なのに「窓を開け」「冷たい空気を吸い込め」「閉めろ」「ピリッと気持ちが締まったか」と濁(だみ)声「私は若いころ、真冬の寒い日に禪いっちゃんになって池に飛び込んだ、風邪などひくものかと思えば、風邪から逃げて行く」と典型的な戦争時代の精神論、その先生10年前の戦争時代、軍国時代には竹刀を持って怒鳴っていたはずと想像できるけれど、今思い出しても威厳も貫録もあったが、当時40歳代かもしれない。多分家ではオレの爺さん婆さんのように畳の上で寝そべっていたのでは。それ以外にたくさんの先生と出会って、にやりと思出す事、苦虫を噛む事と先生たちの顔が頭を掠めるがそれこそ忘却の彼方にほとんど忘れ去ってしまった。

資格も何もないオレが、近所のいくつかの小学校で、画家という事で延べ何百人かの子供に絵を描く授業の時間を持った。子供たちに一言でも琴線に触れる言葉が残せたら、一つでも感動をもらってくれたら、何かをわかってくれたらと思いつつ絵を見る事が好きになってくれ、絵を描く事が好きになってくれ、絵を感じられる人になってくれと絵を描く授業をしていた。今も昔も小学校の絵の授業は専門家の授業がない、普通の先生が苦勞して教えている。素人



なのでアートがわからない、感性がわからない、わからないだらけだけれども、絵を描く技術、方法なら本に書いてあるとそれを駆使して教えているが、傍から見ていると頓珍漢な事を言っていたり、それは違うぞというような事を教えていたり、という場面がいくつも見られた。絵の授業は初等教育の頃こそ専門家が必要とオレの持論。あのころが一番大事、あのころにほんまのアートの事を教えねば。

図版は小学校のグラウンドで居並ぶ子どもたちの姿。